

檀信徒から見た日蓮宗教化

佐藤 策 郎

(前全国日蓮宗信徒青年会会長)

まず最初に、在俗の私のような者が、皆さんに自分の日頃のつたない意見を話させて頂く機会を与えられ、罪障消滅の一端にさせていただくことを、深く深く感謝申し上げます。同時に、ただ今ご紹介いただきましたように、昭和四十六年から五十七年まで、全国日蓮宗信徒青年会の執行部の最高責任者として、南は鹿児島から、北は北海道の礼文島に至るまで、十一年間、いろいろと活躍させて頂き、ご住職、先生方あるいは在職の方にお世話になったことを、改めてここで感謝申しあげたいと思います。

私の入信の動機

まず、私なる者の出生からお話しさせて頂きますが、私は、昭和二年に生まれました。学歴は、当時の呼称でいうと、尋常高等科二年で卒業し、当時の中学校、今の高等学校に進みたかったのですが、なかなか事情が許さない戦争のさなかの昭和十七年の三月に卒業しましたので、向学心をうち切って、国のためと、当時、満州に陸軍の飛行隊がありまして、そこに軍属として就職というか、つきました。ソ連が入ってきたものですから、その半年ほど前に、徴兵適齢が繰り上げになり、徴兵検査を受けておりましたので、すぐ戦争にかり立てられました。忠臣のために、捕虜になるために兵隊に行ったようなものですが、すぐさま万歳をして、そして「暁に祈る」で有名な外蒙古のグランパールで二年間の抑留生活をしました。そのなかで二度入院し、そのために命を救われて、昭和二十年、再び見るこ

ができないと思っていた生まれ故郷、日本に帰ってまいりました。

その中では、夕べまで元気だった人が、翌朝、栄養失調で無理して働き、死んでいるなんてことに時々あいました。死というものの現実、あるいは捕虜生活という特殊な環境の中で、生きるということのすさまじさ、非情さというか、戦争の勝ち負けに対する一つの厳しい事情とか、まだ二十歳にならない年でございましたけれど、本当に残酷なくらいの体験をさせて頂きました。内地に帰って生命があるものであれば、まず、うんと楽をして、自分の命を大事にしたいと、逆にそんな反抗の精神もおきました。でも、やっぱり内地に帰ってきて、目につき、心に考えることは、あの戦争で死んだのならともかく、捕虜という不名誉な中で亡くなった戦友のことを思うと、無信仰であった私にも、生きている者のつとめとして、現実にあつた者のつとめとして、回向・供養というものを何らかの形でしてあげるのが当然である、というようなことでした。このことが私の心に芽生えたような気がしました。それで、家に帰ったらと思つていろいろとしているうちに、病氣(急性肺炎)になつてしまつたのです。当時、医学の進歩もぼちぼちの時代でありまして、ペニシリンが始めていたので、それを四時間おきに打つてもらい、どうやら助かつたわけです。おそらく、ペニシリンがなかつたら、今頃ここに立つようなことはなかつたと思います。

私の運命というのは、世の中がやかましくなる中に育つて、戦争に参加し、捕虜になつて最後は帰つてきたけれど、今度は病氣になつてしまつたのです。今考えてみると、生きたいものだということが、私の今日の命につながり、信仰にもご用を頂くことにもなつたのじやないか。当時、私の寺はある新興教団でした。日蓮宗といえは、むずかしく、布教伝道といつても、わかつたようなわからないようなことをいいますけれど、新興宗教では、“お伝え”といつてますね。簡単明瞭です。それで、私より年上で親のような人が、しかも青年をバカにするようなおぼちゃん連中が伝道に来るわけですが、それに対して私の心では、お前たちのいうことを聞いてたまるかというような、自分が今死ぬような身体であつても、そういった抵抗感がございました。だけれども、命が惜しい、せつかく命が助かつたのだから

大事にしなきゃいけない。そんなことが私の心にありまして、「よし、じゃ一度、お寺の門をくぐってみよう」と思
い、今の檀家寺の門をくぐりました。

最初に私が教えられたことは、人間は三世を通して生きているんだ。前世・現世・来世ですね。そんなことは、今
まで考えてみたこともないし、本でみたこともありませんでした。「なるほど、そうだなあ」「現世では、貴方は国
のためにこそ尽くしたし、悪いことをしないと思っているだろうけれど、二十歳にもならない前に病気をしたのは、
前世において、やっぱり大きな罪を犯したことがあるんだ。因縁があるんだ」、そう聞かせられてみると、「なるほど
なあー」と素直に心に落着くものがありました。法華経のご利益というものを、私は、「病は遠く、菩提の縁なり」と
いう意味をおっしゃっているのではないかと思いました。

私は、ご利益信仰から法華経の信仰にご縁をいただいた者でございます。そしてその病というものが、私の信仰を
今でも支えています。私の身体は、それ以来七分通りか八分通りの健康体にしかもどりませんでした。逆にいうと、
そのことのために、常に仏のことを考え、法華経のことを考え、そして自分がそのために命を捧げることを、大げさ
ではあります、思わざるをえないという、仏の大慈悲を常に感じさせていただきながら、ここまで来たというのが、
偽らざる心境でございます。

やはり私も人並みでありますから、金があれば何か買ってみたいし、楽になりたいし、酒も飲んでみたいし、遊ん
でもみたいと思う心がありますが、人とのつき合いでやむをえずやることはありますが、自分からそういう気持ち
起こしたこともありませんし、起こそうとする余裕さえありませんでした。一般に人は、信仰したのに完全な健康体
にならなければ、ご利益がないんじゃないかと思うでしょう。けれど、私は、そういった健康状態を頂いたことが、
ご利益だと思っっているんです。おそらくそうでなかったら、全国の信徒青年会の結成する活動などという、むずかし
い問題はバカらしくて、十一年間もやれなかったと思います。去年、全国日蓮宗青年信徒会の会長を、病気になるた

と同時に辞めさせていただいたんですが、血圧や心臓病を患って、八十日間ほど入院したんです。その時、思いましたね。「なぜ私が、あんなに大変な役目を法華経のために、普通の人ならばありがたいという気持ちさえ忘れなければ、救われてよさそうなものなのに、なんで入院までしなきゃいけないのだろう」と。やっぱり私には、まだまだ信仰が足りないんだ。十一年間も信徒青年会の活動という大変な仕事をしたんだという思いがあつた気が、私の心の中にあつたんだ。それを、仏が最後の戒めとしてゆっくり考えてみると、八十日間の病気を与えて考えさせてくれたんだと思います。

私の寺は新興宗教から別になるくらいですから、ものすごく信仰に燃えておりました。本堂ができた年、檀信徒総決起大会を、私が提唱して開いてもらったんです。その時、なぜ、そんなことをやったのかというところ、ひとつの齟齬を寺に感じたからです。最高に達したな、これからは、このまま平らな状態でいけばいいけれど、ひよつとして下り坂になる可能性の予感があつて、引きしめなきゃいかんと思ひ、総代もしておりまして若くてなまいきだったけれど、問題を提唱し、それで引きしめたつもりでございました。同時に、これからの教化は、若い者にひょうをつけないければ寺というものも、いつでも生き生きとした法華経伝道型の姿にはおけないと、そういう問題も提唱しました。青年会の問題も、そこで討議をしていただいたという課程もございます。そういうことで、私の入信の動機は、まさに病から入ったということでございます。

日蓮宗寺院の現状とその考察

私なりに、今の宗門の現状というものはどういうものかというところ、無理に四つに分けて、私なりの体験から、あるいは日頃考えていることから、こうしたらどうだろうかということ提案したいと思ひます。

まず、私どもは、一般にお寺というと、「法要儀式のされるところ」、これは当然しなければならぬお寺としての

つとめなわけですが、宗祖大聖人は、あるいはご本仏のお釈迦様は、それだけにとどめてはいないわけで、いわゆる生きてゐる者の教化というものを、私が言うまでもなく、説いてるのでございます。

霊との関わり合いと生者の教化と、今さらここで言うことはないんですが、実際問題として、生者の教化を一所懸命やっておられるわけですが、対象となる人々は、一般にいうと、年寄りの方、老人層が非常に多い。人は、ある程度年をとると、お寺に行く。そして後生を頼んだといったパターンで、それが七〇〇年の伝統で大部分の寺がきてゐる場合が多いのじゃないのか。中にはそうでない寺もあります。そこで私は、もつともつと若い方々の教化をして、老若男女を問わず教化してゆくといいことが、当然、大事ではなからうかとつくづく感じております。

それからそういう信者の集団というか、檀信徒の集団というのは、大抵、自分のお寺は大事にするし、寺を守つてゆくということには、抜群の能力を発揮するし、力も真心も持つてゐる。ところが、日蓮宗の宗徒であるという時期、県の護法大会や地域の護法大会に参加すれば、日蓮宗というのは大したものだなというような気持ちも起こさせるけれど、宗門の弱さは、日常の教化活動が宗教化してゐないと思ふんですね。一発勝負の行事は大変上手です。私も護法大会に行くと、湧き立つような感激を覚えるんですよ。ああ、日蓮宗つていうのは大したものだ、新興教団なんて大したことはないと思ふけれど、恐れるに足りないと思ふんですが、後が続かないんです。何の行事でも同じです。私は十一年間、田舎者ではありませんけれど、つぶさにこの眼で確かめ、身体で参加して体験させていただきましたが、誠に一発勝負は上手なものがございます。それはそれで、ひとつのアドバルーンとして悪いことではなく、良いことだと思ひます。宗徒に、「日蓮宗あり」と、法華経に自信を与える大なる機会でありますから、それはやるべきだし、良いことだと思ふんです。けれども、そのアフターケアが必要なんです。その信仰をやつぱり日常化してゆく。あの高等な理論を聞かなければ納得できない人から、今腹が痛いから、この腹を何とかいへばいいのか、医者にかかつて治すか、あるいは祈禱して治すかという信者の細かい悩みから、高等な求めに応じるだけの対応がなければならな

い。

ところが今の教師は高等な理論はたくさん説いてくれるし、そういう人に対して、ある程度満足を与えているものが教師集団でありますからね。事実私は、大部分が宗立の大学あるいは都会の大学を出てきた頭脳集団の教師の集まりの組織だと思います。じゃあ、腹が痛いとか、あれをこうしたいとか望みを叶えていないかというところ、それもやっぱり、私は叶えていると思うんです。叶えているけれども、その時限りで終わっている場合があるんですね。だから、ありがたいということさえ忘れなければいいと、とどめておく、とどめさせている。そこが、私は足りないと思うんです。やっぱりもう一歩引き上げて、あの時はこうであったな、今はどうしている、やっぱり人生はいろんな悩みにぶつかることがいっぱいありますから。たくさん信者がいれば、目が届かないこともあるでしょうけれど、目の届くような常日頃の教化、いきようという者に対する教化というものをして、こちらから檀信徒の顔を見たら、何かを問いかけさせるような、そういう信心に一度行き着いたら、アフターケアというものができてゆく。そうしてゆけば、私は、もつともつと信者が信仰によって理想的な姿に燃えてゆくと思うんです。病氣や困ったことから、まず信心に入って、そしていわゆる成仏という世界にみつぐということができると思うんですが、その点、大部分のお寺が、まだまだ新興教団に比べたら不足しているんじゃないだろうか。やっぱり、上人といえどもかすみ食って生きているわけではないので、お寺を経営してゆくということが、まず第一に頭にはあるんでしょうが、恵まればそれなりに人間間というもの、我がままで余計なことを考えるし、困りすぎれば、それなりに理屈を考えるし、きりが無いと思うんです。問題は、やる気と姿勢の問題じゃないかと思うんです。生意気なことを申し上げて恐縮ですけども、そんな気がします。

お寺が盛えたり、あるいは衰えたり、ある程度はやむをえないと思うんですが、それはなぜかと私なりに考えた場合、教師布教型だったからだと思うんです。ろうそくの芯はお上人で、ろうは檀信徒である。檀信徒は布施するもの

であり、教師は布教するものである。そういった意味のことを代表におっしゃっているとお聞きしたことがあります。原則的にはそれで良いと思いますが、やっぱり教師といえども、偉くなれば偉くなつたようにいろいろと仕事もありますし、なかなか手の届かないこともあるわけですね。原則としてはそうなんだけれども、新興宗教がなぜ僧侶のいない教団でありながら燃えているか、法華経がどんどん広がって若い者にまで活気を与えているかといえ、そういう新興教団は、すべからず聞く側であり、聞かせる型であるという自行化他の布教の仕方をとっているから榮えているんじゃないかと、私は思っています。そんなことは、私が言うまでもなくわかつているんですけれど、実際問題で、内部の伝統を破つてゆくには、なかなか勇氣のいることだろうと思います。なぜならば、信徒というのは、中途半端な信仰にしておく、俺があつた寺を護持しているんだという、増上慢の気持ちを起こさせる。何かちょっと教学を覚えると、お上人よりも知つたかぶりをしてお上人を悩ませる。どうせそうならばというような気持ちを起すようなことも考えられなくはありませんが、法華経の信仰というのは、常に仏が生きていて導いてくれるので、なつたらなつたでちゃんと仏が教えてくれる場面がでてくると思ふんです。そういう者には、それではいけないよと、仏が手配してくれる部分がでてくると思ひます。そういう生きた教化というか、そういうことを恐れない教化というものを、信徒は信徒としての分際を守つて、いかせる教化というものに勇氣をもつていただきたいし、教師の皆さんから、菩薩道の実践を信者にもさせるような行いを、示してほしいと思つております。

以上、まとめてみますと、お寺というものはご住職がおり、奥さんがおり、若い跡継ぎがおりというような状態があるわけです。それぞれに役目を果たしていけば、すさまじい持統が伝道教団の最たるものになりうると思ひます。おもしろいもので、奥さんからお話を聞きたい人もあるわけですね。私が十一年信徒青年会の会長をして全国を回つて、たくさんのお寺にお世話になりましたが、やはり奥さんがしつかりしている所というか、よくできていた所というの、人が集まりやすいし、私どももお邪魔しても気兼ねなく、思う存分のことをさせていただきましたし、非常

に貴重な存在だとつくづく思っております。教化の先生方は、常にそうした奥さんがお寺を伝道型の考えを持ってゆくとしような、それぞれの立場を守りながら、なおかつそうした姿になっていくということが理想ではないだろうか。大変なことでございますけれど、ぜひそういう姿にさせていただきたい。今日の日蓮宗があるのも、こうした寺と云うものがあり、教師の方々が前世から現在に至るまで努力されたからこそ、存続しているわけです。私は、いかに創価学会とか、いろいろな新興教団がたくさんあるけれど、やはり正当の教えというものを、歴史的にも教学的にも遺産的にも守って、将来共に教化してゆくのが日蓮宗であるという気持で、日蓮宗をこよなく信じ、愛しているつもりです。

青少年教化の重要性

いつの時代、いかなる宗教も、常に時代をになうべき青少年に、夢と理想、実現への希望を与える活動と育成なくして、その宗教に活力と発展は生み出せない。こんなことも今さら言うこともないのはわかっていますが、幼稚園などに行くと、騒々しさを与えますけれど、何か、未来に対して生き生きとしたものを感じとれます。それと同じように、我々も年をとりましたが、いきりたつてみたところで、世の中の真理でありますから、抵抗してもどうしようもないわけですが、何か淋しい雰囲気というものをかもし出してくるわけですね。そしてまた、どうしても年をとつてから信仰を知ると、守っていくのが精一杯で、なかなか人にこうしなければならぬとか、こうすればいいんだと思つても、自分の身体と行動が一致してこないようになってきます。ですから、人間の大事な時期に人間形成をしてゆくという意味からいっても、決して私は、年をとつてからあわてて信仰するものではなくて、まさに少年時代から家庭の信仰になじませてゆくというものではなからうかと思えます。そういう意味では、宗門でも、青少年教化対策委員会にすえても、青少年教化委員会というものを、社会活動を中心にして動きを示し、少年少女の道場というものを研

修道場を、教師自身が各地で開いてどんな育成されていることは、私は大変好ましい状態であると思っております。青年は理想を持つがゆえに、青少年ですぐ解決できる問題にのみ取りくむだけの生き方は、人間の心を怠けさせ、すぐ解決できない高い理想を掲げて、ためまない努力・精進をすることは、その人を強くする——これは埼玉県日蓮宗青年会の機関紙に掲載させてもらったものです。私はまったくこの通りだと思えます。ある程度年をとると、保守的な考え方になるもので、これも人生や歳の成せるところで、そんなに無理をしないでやっていこうというのが、宗教の世界だけでなく、すべての世界だと思えます。ところが青年というのは、時によっては、自分の命がどうなつてもという理想に向つて驀進する危険も持っているかわりに、情熱をも持っているわけですね。やはり、こうした年寄りの、「まあ、まあ」という力と、あるいは人生豊かな信仰経験と、青年のそうした現状よりも発展・理想を求めてゆこうとするものが、教団の中にあつて、活力・発展、あるいは誤りない方向というものがでてくるんだと思います。ただ誤りなく誤りなくというだけでは、現状維持が精一杯で、それから退化してゆくことの方が多いんじゃないかと思えます。そういう意味で、私が青年会活動をここで起こさなければならぬと感じたのも、そういう理由からでございます。

全国日蓮宗信徒青年会の結成・活動と問題点

これは先ほどからも触れてきましたけれど、私のご利益信仰から入つて、お寺でおとなしく黙っていればいいものを、なぜ全国という日蓮宗の方へ手を出したかということ、少しお話しします。大部前になります。千葉県の清澄山で第一回全国日蓮宗信徒青年の集いというものが開かれました。私は田舎者でありましたので、全国の信徒青年の集いというんだから、少なくとも百五十から二百名ぐらいは集まっているだろうと、喜び勇んで参加しましたが、参加者は四十名そこそこでした。それも孫にお世話になつていような研修生二十名ぐらいの方が参加して、そのぐ

らしいの数で本当に驚きを通りこして、第一回目ではあったけれど、考えようによっては一回目だからこそということもありましたが、正直のところ憤りを感じました。「なんとというさまだ、これが日蓮宗の現実か」と。

私はその時、田舎で考えた日蓮宗の現況というのは、何にもわからなかったもので、そこで数だけ多ければいいというわけではないけれど、あまりにも情けない姿だ。日蓮宗の信者というのは、信者そのものが、お上人だけが一所懸命やって、信者がまだ布教型になっていない。やはり信者もお上人を助けて戦力になってゆくという信仰を与えないれば、日蓮宗というのは、いつまでたっても発展しないし、広宣流布なんていつたって、いつのことだかわからないというような生意気なことを考えまして、何人かの同志と、第一回目の時から話し合いを始めたんです。宗勢調査では、二百ほどの信徒青年会があるんだけど、実際活動しているのは二十団体そこら。そんなものを大体全国の名をかぶせたってしょうがないじゃないか、まだ時期尚早なのではないか。もつともっと青年会を末端につくって、三角の頂点に全国信徒青年会をつくれれば理想だし、順序だと思いう最もな理屈もありまして、一回目の会議では保留、二回目を開いて、そこで正式に討議をしたんです。

二回目の集いの後の秋に、そのために護法伝道部、護法運動の関係の上人も参加して、有志の方々が五、六団体集まったでしょうか。そこでにわかに、やっぱり全国的なつながりというものがなければ、全国に信徒青年会をつくって、青年会活動を両輪のごとくやってゆくのはむずかしいから、やはりつくるべきではなからうかと、というような指導・助言・意見などがまして、昭和四十六年四月十一日に、池上の本門寺で決起したわけです。当時はたった七団体でした。とにかく義理でも全国組織なんていえるような数ではなかったけれども、お題目も七文字からできるし、七団体でいいじゃないかということで、常識を破った頂点から下に呼びかけて、青年会をつくるようになるけれども、これもやむをえないんじゃないかと、やっぱり思いたったが吉日ということもあって、我々の時代にこれをやらなければ、いつまでできるかわからないという思いでした。正直なところ私は、その時、歳も四十を越しておりましたの

で、つくるまでの役目を果たさせていただいて、あとは若い方々から実質的にやってもらおうと、そういうつもりでしたんですが、どういう風の吹き回しか、私が一番何だかんだと意見を出したいきさつもありまして、初代の役を務めよという意見になって、十一年間も務める結果になったわけです。二、三年もやれば、青年同志もできて、日蓮宗も変わってくるだろうと考えていましたが、今考えてみると、バカみたいな考えを持っていました。それが何と、二、三年すれど、四年、五年すれど、一向に数がふえてゆかないし、加盟しないまでも、優秀な青年会がどんどん出来てゆくような状態ではなかった。ついついこの年まで辞めるに辞められずやってしまったというようなわけでございます。

ところで青年会をつくった時、どのようにして青年会をつくろうと呼びかけていこうかと、正直迷いました。私は山形県ですから、東京のど真ん中にあるのであれば、連絡がしやすく、動きやすいけれど、山形の大火のあった酒田から二十キロばかり山奥に入った山人中ですから、それは大変なものでした。私と一緒に頑張った人が、私の所に来て、「佐藤さん、こんな所で生まれたのか」と、私の生まれた所が悪いみたいな話をされますけど、職業は農業です。山の中で唱題修行するにはもってこいの場所です。

それで私は考えました。考えている時に、大難にあったんです。どういう大難であったかというところ、今までかつてなかったような、わが地域に大洪水があつて、私は二町歩ほど田んぼを作っているんですが、その二町歩だけでなくて、その地域一帯の田んぼが決壊しまして、みな石がわらになつたんです。今や穂がでるべく状態になつていた稲が、みんな土、石にうずもれてしまつて、穂先さえも見えない状態になつていました。

あの時は、もう茫然としました。何でだろうという気持ちでいっぱいでした。これから法華経の大使命を果たさせていただろうと決心したのに、なぜこんな難にあわなきやならないんだろう。半分は疑いましたし、半分は考えましてね。だんだんと心が落ち着いてきた時、よく考えてみましたら、ああ、これはまさに天が与えた時だと、仏が与えた

時だと。

なぜそう思ったかというところ、本来ならば勤め人と違って暇があるとはいえず、それなりに二町歩も作ってあれば、そんなに歩けないですよ。ところが、働こうにも働く田んぼが全部土砂に埋まってしまったので、私、仏がそうさせてくれて、私を田んぼにからなくてもいいように、全国をできるだけくまなく歩いて、呼びかけていけよ、信徒青年会の必要さ、信徒青年会を育ててゆく重要さを説け、とこういう時を与えたのだと思います。「難来たるをもって、安樂行と成す」という言葉があるそうですけれど、この時ほど、この言葉が身にしみたことがございません。

先祖には申し訳なかつたけれども喜びました。やっぱり仏は生きている。私のような者にも、この法華経を説けるという条件を与えてくれたのだ。そう思いました、立派なことを言うようですが、本当にそう思いました。それでまず、東京に出てきました。

日蓮宗信徒青年会をつくった当時、こういう意見がありました。よく宗門の事情をわかっている都会の人達がいるには、「宗門なんてあてにならないよ。そんなものをあてにしたってダメだよ」ということでした。私、何にもわからなかつたんです。宗門ってどういうものであるか、宗務院ってどういうものであるか、山の中にいましたから。けれども、それは、大学の出た信徒青年の言うことで、インテリ青年の言うことであつたけれども、私は聞かなかつたんです。いや、それは常識的に考えて、今どういう存在であろうとも、やはり宗務行政と関わりを持って、信徒青年会をつくってゆく理解と協力をしてもらわなければならぬと、それがすじであると思ふんです。貴方が何と言おうと、私が会長になった以上は、すじを通して、ダメなら根気強く、何回でも交渉しお話をし、この問題をしめてゆきましようという気持をもち、だから歴代の総長にも会っていますし、護法伝道部にはとてもお世話になり、他の部にも世話になつたし、あるいは宗会議員の方や宗務所長の方にもお世話になりました。

私は、普通は気が小さいんです。自分のことになると、言うことも言えないような人間だけでも、法華経のことに

なると、家内からもよく言われるんですが、人が変わったようになるんですね。やっぱり私は、そういう氣質を仏から与えてもらったことはありがたいなと思います。

それからは今言ったように、十一年間、一カ月のうち一週間ないし十日、九州から北海道まで常に歩いて、九州と北海道は一度しか行けなかつたけれど、あと中間地域を回つたというのが現実です。そのことがあって、やっぱり生きていると感激しながら、全国を回り、教師の皆さまには大変お世話になつてきました。

ところで、「いやあ、お前、百姓で職業はいいとしても、家庭はどうなんだ」といわれもしました。先ほど長谷川現宗研所長さんから、家内とともに全国を回つたというご紹介がありました。いつも回つたわけではありませんけれども、そういうことが多かつたんです。なぜならば、一つは健康に自信が持てなかつたからです。一人で歩けるような状態ではなかつたんです。それが本音なんです。家内も立派に協力させてやろうというのが本音ではなくて、自分ひとりでは歩けないし、自信が持てなかつたから、実は歩かせたんです。一緒に歩いてもらったんです。それでだんだんご利益をいただいて、丈夫になりましたので、後半はほとんど一人で歩く時が多くなりました。けれども、私の家内は大変良くできていまして、「お父さんはこのことで助かつたんだから、どんなことがあつても、家庭のことは何をおいても、このことはやつてもらわなければならぬ」という姿勢がありました。子供は六人います。歩くことは、子供達がまだ幼稚園の時から始まつたんです。子供だけで留守番をさせ、ご飯を炊かせて、上の子が高校で、中学・小学、一番下が幼稚園であつた。常識でいつたら、きちがい沙汰ですよ。そんな状態で歩くなんてことは。それでも、家内が大変によくできていまして、「お父さんは、こういうことをしなければ生きていけない人間だから、いろいろと苦労はあるだろうけれど、お父さんが死んだよりはいいんだから、そのことをよく理解して、一所懸命勉強するように」と常にいつてくれていますね。だから私はいつも言うんです。「家内ひとりから反対されたら、日本全国の人から反対されたほどの力だ」と。逆にいえば、家内ひとりから協力されたら、日本全国の人から反対されたほどの力だ」と。

という意欲がでてくる。男なんて、本来そういうもんじゃないかと思うんですね。日蓮大聖人は、結婚はされてないけれども、非常に女房の重要さを説かれています。私の場合は、まさにその手本みたいな素晴らしい環境に巡りあわせて、役目を果たさせていただいたというのが現実で、ありがたいと思っています。子供たちも、お蔭さまでご利益をいただいで、すくすく育ち、その中の一人を何とか出家させたいと念願しています。

私自身も、これまでやったんだから、お前もそろそろ出家しろよなんて、人から言われますが、正直なところ、私皆さんのような立派な教化はできないので、出家する自信もありません。今だに道場を立てるなんていう生意気なことをしていますけれど、出家する自信ありませんので、在家のままで頑張っております。これからも、いろんなこととお世話になると思いますが、宜しく願っています。

お題目総弘通運動の展開について

宗門の行政の中で、片山日幹宗務総長の時に護法運動が始められ、渡部日皓総長時代に至って統一信行、唱題行を中心とした運動が展開されました。そして去年からお題目総弘通運動が始められました。お題目総弘通運動なんておかしいじゃないかと思うけれども、よく考えれば、大事であり、悪く考えれば、いままでやってなかったことになるわけです。だから、今年祈願祭というか、それが清澄寺であった時、四月二十八日に私、初めてお参りさせていただきました。大雨でした。その時私は、日蓮宗も現状のようだなとつくづく思いました。何百か何千か知りませんが、風船をあげようとしたんですが、あがらなかつたんですね。本当に悲しかったです。まあ、お通夜ほどには感じなかつたけれど、これが天が示してくれた日蓮宗の現状ではないか、こんなことではダメだ。去年、八十日間入院して死ななかつたのは、このことのためか、よし俺も在家の分際ではあるけれど、将来、道場を立てて、どれほど教化できるか、全国の心ある教師の方々と手をたずさえて、教化に一所懸命頑張ろう、と決意を新たにしました。

お題目のことについては、最も大事なことなので、私が言うといろいろ誤解を招くことがあると思いますけれど、触れておきたいと思います。一遍唱えても、三遍唱えてもお題目の修行だし、病気の時は寝ながら唱えても、あるいは夜眠る前に唱えても、みんなお題目を唱えたことになるし、厳密にいえば、みんな唱題行だろうと思います。

宗務総長が唱導され、統一信行で取り上げられた唱題行、若干形は変えられているけれど、私はこの唱題行に出合ったのは、実は第一回目の昭和四十四年の信徒会全国の集いの時でした。その時、私の住職の師匠は村田の妙法寺の清水上人です。その方が、年一回、私どもの寺に来て、お題目というものはこういうふう唱えるものだよということを教えました。それは自分の唱えるお題目が自分に確かに聞こえる、そういうお題目の真心というか、声もある程度高く、はつきりという意味だと思ふんですが、だんだんあげているうちに、自分の唱えているお題目だけれど、それがお釈迦様の唱えているお題目になって、自分の心にはね返ってくるような心境になった時、まさに即身成仏の境界であるぞ、とこういうことを言われたんです。なるほどなあと思いましたが、おそらく清水上人が二十回近く来てくれ、その時は会っているんですが、その後お亡くなりになりました(信徒青年会が出来た頃は生きていたんですが)、私はそういう状態にはなれませんでした。真心が足りなかったのかもしれませんが。

ところが皮肉なことに、その信徒青年の集いに行った時に、偶然にも清水上人のおっしゃった体験を、私は、湯川日淳上人が唱導された唱題行の方法によって、初めて体得したんです。その時の感激というものは本当に来てよかった、唱題行というのは素晴らしい、この理路整然と整備され、つくりあげられた唱題行は素晴らしいものを持っているということ、私はこのことを体験し、この時、将来、唱題道場を建てたいという発願を持ったわけです。

今まで一遍も唱えたことのない方に、お題目を唱えさせ、涙を流して感激することや、あるいは、俺は今まで悪くなかったという、親不幸に対する慙愧とか、理屈抜きに唱題行の中で感応させることがあるんですね。私は、そう三証具足と仏教では言われておりますけれど、唱題行はまさに証明されるものを充分に持っている、と思っております。

一息一生の唱題といわれる方にも出会っておりますが、大聖人が龍の口で首を切られようとした時、あるいは十遍ほどのお題目をお唱えになって立教開宗をされたとなっておりますが、その時のお題目というのは、一息一生のお題目じゃないか、それはそれなりの意味づけというものがあるんじゃないだろうか、そんなふうに思っております。

私も、小さな子供達から青年・年寄りに至るまで、私なりの力で、年代を問わず、教化させていただいておりますけれど、子供達が最も嫌がるのは唱題行ですね。なぜかという、足が痛いからです。理屈は簡単です。「じゃあ、やめようか」というと（人間はここが宗教本能というか、あるんだと思うんですね。宗教を求める心、だから新興宗教が栄えているわけですから。日蓮宗に來ないはずはない、と私は思うんです）、でも、やっぱり何かよかつたと言わうんですね。これは教師の皆さんも体験されていると思いますが、やはりお題目は即身成仏、唱題成仏を説かれたことだから、当然といえは当然ですが、不思議なものを、唱題行は持っていると確信しております。

やはり六波羅蜜の修行をとらえてみますが、人間わかっていることを、自分の行ないを自分で意識的に正してゆることが、六波羅蜜の修行だと思わうんです。お題目を唱えたからといって、いつも感激して涙がでるといってもありません。最初に感激することもあるし、長い間やっていて感激することもあるし、その一遍の何かを得たものが、その人の生涯を支配する力を持っているわけですね。それは素晴らしいことだとつくづく思っております。

お寺をそれぞれ守っていくことは、当然のことであつた大事なことです。それがなければ、日蓮宗は滅んでしまふわけですから。同時に、お寺を守るといふことをさせながら、布教前線に使う布教の姿に信者を導いていただきたいなと思っております。

特に重ねて申し上げますけれど、全国日蓮宗青年会の第一回目の池上結集を開いた時に参加して、たとえ宗門のためになるうとも、宗祖の教えに反することは捨てざる勇氣を持つこと、これは矛盾しているようだけれど、大変大事なことだと思わうんです。自信がそういう歩みを教えるかという、何か悩んでいるみたいですが、悩んでもらう

でも困るんです。僧侶が悩んでいては、信徒はどうしようもないわけですから。もつとしっかりしてくれと、第九回の大阪結集から二十回の池上結集まで、私は僧侶の結集大会にも常にでて、生意気なことを申し上げてきましたし、一緒に研修させてもらったこともあります。ふらふらしている部分があるようですけれど、私もこのへんでひとふんばりしなきゃならんと思つてるところです。

最後に、宗門のある宗会議員をされた方から、丁重な手紙をいただいたのを、参考に読ませていただきます。

宗門の動きはうすわすべりしている。足が地についていません。立脚した具体的な社会教化活動など、それぞれ不足しているんです。末法の現代は、説教・言説・修法・祈禱・儀式・法要だけでは、どうにもならない。やはり布教してゆかなければならない。僧侶青年会と信徒青年会が、お互い切磋琢磨して一体となり、これからの宗門を背負うべく祖願の達成に精進する以外、宗門の発展はありえない、と私は確信している。現在の僧侶だけの日蓮宗青年会の内部から、信徒青年会を結成すべきだという論がでてこないこと自体に、問題がある。教化活動を実践し、生活に則応した活動を通して、立正安国に仏国土に直進することこそ、この激動混乱時代に生ずる、大聖人の願業であるべきだと思う。

こういう意味の手紙を頂いております。余程心にして、私みたいな者にくれたものだと思つて、私もなお一層頑張れということの励みであると同時に、皆さんにもお願いして頂きたいという意味ではなからうかと考えております。何も参考にならなかつたと思うんですけれど、山ザルみたいな佐藤策郎という者がでて、おかしいことを言つたというだけでも結構です。皆さんに、何かささやかな、一つでも参考になつていただければ、私の罪障消滅にさせていただくこともできるし、皆さんもまた、これから僧侶という素晴らしい宿命をいただけてきた、役目を果たさせていただくことができると思ひますので、頑張つていただきたいと、心からお願ひ申し上げます。

(本稿は、第八回教化学研究会で青年会運動を通して教化について述べたものです)